

13 歳ファイナリストのネイティブコンテンポラリーダンスに関する一考察

豊福彬文（んまつーポス／宮崎大学客員研究員）
野邊壮平（同上）
児玉孝文（同上）
高橋るみ子（宮崎大学客員教授）

1. 実践研究の背景及び目的

創作ダンスを出自とするダンスカンパニー「んまつーポス」は、地域の認可保育園と連携し、「国際こども・せいねん劇場みやざき」(CandY)をデザインした(設立 2019 年)。この環境を幼少期から身近にしてきた子どもたちが中高生となり、横浜ダンスコレクション 2024 新人振付家部門で最年少ファイナリストとなった。審査員からは「コンテンポラリーダンスを自然なものとして軽やかに受け入れ、発展させていった子どもたちに、ダンスの明るい未来を強く感じる。『ネイティブコンテンポラリーダンス』な子どもたちだ」との講評が付されていた。これが、本実践研究の背景である。翻って、彼らは小学生時代に乗越たかお氏のインタビューを受けている(『地域創造』2021 年 12 月号「コロナの視座①-レジデンス再考-」)。「振り付けはほとんど自分たちで考えた。学校の同級生はアイドルのダンスを真似しているだけだけど、ここでは自分でつくれるから楽しい。」(片山鉄生・10 歳)や「決まった振りは、覚えたらそこで終わり。でも自分でつくったダンスは、どんどん進化させられる。」(多炭淳詞・10 歳)等の彼らの回答に対し、乗越氏は「頼もしい声が返ってきた。とにかく技術を覚える“習い事”になってしまいがちな日本のダンス教育だが、彼らの言葉はアーティストの言葉そのものであり、大いに驚かされた。」とコメントが添えられていた。これが、本研究の発火点となった。

本研究の目的は、「ネイティブコンテンポラリーダンス」の形成要因と教育的意義を明らかにすることである。併せてその再現性を検討する。

2. 研究方法

ネイティブコンテンポラリーダンスの形成要因と教育的意義を国際的な視点から検討することを目的に、2025 年 6 月に国際ダンスフォーラム「ダンスの未来 ネイティブコンテンポラリーな子どもたち」を企画・開催した。海外パネリストに、子どもや若者と創作を行う国際的な実践者の Renee Nõmmik 氏〔エストニア Fine5 Dance Theatre 主宰〕と Adrian Tibu 氏〔ルーマニア Gong Theatre 芸術監督〕を招聘し、両者の発言の記録及び事後コメントを分析対象とした。

3. 結果

Renee 氏と Tibu 氏の発言及びコメントから二つの観点が浮かび上がった。

○創作主体性と協働性：創作ダンスが身体能力のみならず自信・自覚・共感・責任感を育み感情的満足を与える。彼らの協働性は、対話を通じた役割の自発的分担と意思決定の反復によって育まれた (Renee 氏)。

○普遍性と固有性：ダンスは言語を超える表現なので、彼らのダンスの奥行きと真率さが異文化間の理解を媒介する。国を超えて観客が自分のことだと感じることが出来る国際的読解可能性を有するオリジナルな表現力が対面の共創実践によって育まれた (Tibu 氏)。技術統合が進んでも身体性と個性を帯びたダンスは個人／異文化交流の要として存続する。彼らは、SNS 時代の可視性を享受しつつ、対面の共創実践によって独自の身体言語を獲得した (Renee 氏)。

4. 考察

フォーラムのファシリテートを務めた中富氏(横浜市芸術文化振興財団)も「接触機会は増えてきたが、創作を実践する場はまだ十分ではない」と述べている。幼少期からの経験が中学期の創作主体性と協働性へと連続的に転化したのは、CandY をハブとする継続的な共創環境がこの欠落を補っていたからであった。また、彼らの普遍性や固有性をオリジナルな表現で世に出す力の育成に資していたのは、対面の共創実践と、2023 年より CandY で継続・実施する「空はひろいな！みやざき国際ダンスフェスティバル」の関与が推測された。以上のことから、形成要因は、①身近なアーティストとの高頻度・長期接触、②子ども主体の役割分担と意思決定、③鑑賞-模倣-創作-発表-対話の公開循環に整理できる。ネイティブコンテンポラリーを再現するためには、小規模・高頻度・短サイクルのプログラムの常設化と、質の高い鑑賞の機会の提供が必要であり、それはアーティストと劇場・学校・地域・行政の連携なしには難しい。

2025 年 9 月に横浜ダンスコレクション 2025 新人振付家部門のファイナリストが発表され、同じくネイティブコンテンポラリーダンスな 19 歳が選出された。彼女は、現在舞踊を専攻する大学生であり、小学 2 年生から「んまつーポス」と出会い、コンテンポラリーダンス漬けの日々を送っていた。小学生期からの“ネイティブ化”のケースとして、今後も縦断的に追跡していきたい。以上より、背景で示した発火点は、目的で掲げた形成要因と教育的意義の解明、さらに CandY モデルの再現可能性の検証へと接続する。